
すーぱぁ大怪獣出現

K1.M-Waki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すーぱぁ大怪獣出現

【Nコード】

N2753U

【作者名】

K1・MーWaki

【あらすじ】

俺は葵輝久。防衛大学を首席で卒業した未来のエースパイロット・
・だったはずだ。それが今は浪人生の居候の役回りだ。何でこう
なったか。そもそもの始まりは、俺が御手洗博士に出会ったところ
からだ…

すーぱぁ大怪獣出現【1】

すーぱぁ大怪獣出現【1】

(1)

俺の名は葵輝久。航空自衛隊の見習いパイロットだ。今年、防衛大学をトップで卒業した俺の実力をもってすれば、エースパイロットになる日もそう遠い話ではない筈だ。いや、筈だった。

そう、あの変な爺さんと顔を合わせるまでは・・・。

不幸は、茶色の封筒に入ってやってきた。

それは『辞令』と書かれてある以外は何の変哲もない物だったが、中身はそうじゃなかった。結局、俺は紙切れ一枚でとばされた訳だ。異動先は『情報戦略自衛隊新装備技術開発部隊未来技術研究班』、長ったらしいので略して『未来研』といわれているところだ・・・そうだ。

そんな部署は知らないって？

俺だって知らなかったんだ。一般人が知ってるわけないよな。

情報戦略自衛隊そのものが公にはなっていないのだ。ましてやその中の研究部門であれば超機密事項である。俺も名目上は空自の所属になったままだ。(補給部隊の所属にされたのは気に入らないが) そんな所で一体何をさせられるのか不安でもあったが、果たして俺の役目はテストパイロットであった。未来研で開発される各種装備やメカのテストをするのだ。

実はこれが想像以上に過酷なものである事には、この時は考えもつかなかった。

(2)

転属の初日、俺は未来技術研究班の責任者である御手洗博士を訪

ねた。

「おう、来たか。待ったぞ」

「葵准尉です。これからよろしくお願いします」

「うんうん。立派な青年じゃのう。時に葵君、心身は頑健かのう？」

「はあ、一応は健康体ですが」

変なことを訊く爺さんだなあと思っても、口には出さない。ま、多少は顔に出たかもしれないが。

ひとしきり俺を眺めていた博士はこう切り出した。

「早速で申し訳ないが、仕事を頼まれてくれんかのう」

「構いません。それが自分の役目ですので」

「そうかそうか。では、・・・」

博士は、子供のような笑みを浮かべながら、何やらごそごそと箱を引っ掻き回すと、何かのベルトを取り出した。

「おう、あったあった。葵君、これを腰にまくのじゃ。それからなあ、これは両手首だ。ベルトを身に着けたら、一緒に来てくれ」

俺は言われるままに腰と手首に何やら妙なメカのくつついたベルトを巻き付けると、博士に連れられてテレビカメラや各種センサーの設置された部屋に通された。俺はこんな作りの部屋を前に一度だけ見たことがある。爆発物や危険物を処理する為に、周囲が防爆隔壁に覆われた部屋には、危険な匂いがした。

「まずいぞ」と本能が教える寸前、博士はそそくさと部屋を出るなり、外から鍵を掛けてしまっていた。

「は、博士。大丈夫なんですか？」

俺は目いっぱい不安にかられたが、

「なあに、心配はいらん。ちゃんとデータはとっとるからな。では、実験を始めるぞ」

俺の心配をしてくれている訳ではなさそうなのが気に掛かるが、こうなっては仕方がない。外から鍵を掛けられては手も足も出しようがない。

「葵君、まず、両腕を延ばして顔の前でクロスさせるんだ。手は開

いて指はまっすぐ延ばしておく。違う違う、手首の所で・・・そうそう、いいぞ」

何かしら釈然としないままも、言いなりにポーズを作っていく。「両腕を延ばしたまま、外側へ円を描いて今度は腰の前でクロスだ。うん、そうそう。次に、拳を握って腰に引き付ける。・・・うん、そうだ。なかなか飲み込みがいいぞ」

何か変だな。ラジオ体操にしてはおかしいし。

「よしよし。最後は右手を高く上げて、・・・そうだ。左手は腰。・・・違う、拳を握って引き付けて、・・・そうそう。じゃ、一連の動作を続けてやってみてくれたまえ」

いまいち釈然としないながらも、俺は覚えたての動作を行った。

「よしよし。完璧だね。・・・ん、よし。もっかいだ。OK。今度は、今の動作の後にこう叫ぶんだ。『バトル・ジャケゝット、セゝットアゝップ!』。わかったな」

「・・・」

あまりのことに、俺は一瞬惚けてしまった。

「どうしたんだ？早いところやらんかい」

「一体ゼンたい何の冗談なんですか。新規装備のテストじゃなかったんですか？」

「何を言っとるんだ。わしの命令がきけんのか？いいからさっさとやりなさい」

俺は渋々ポーズを作ると、ぼそぼそとしゃべった。

「バトルジャケツ、セツアップ」

ううう、なんて恥ずかしいんだ。こんなのをビデオで記録されてるなんて。

「違う違う。何訊いてたんだ。もっと、こう、勇ましくだよ。・・・もっかいだ」

「まだやるんですかあ？」

俺は自分で聞いても情けない声を出した。それ以上にやってることが情けない。

「当たり前だ。出来るまで、練習するぞ」

仕方がない。こうなったら自棄だ。俺は目いっぱい派手にポーズを決めると、声を限りに叫んだ。

「バトォール・ジャケッツ！、スウェー トッ、アッップ！！」

叫んだ瞬間、ベルトからまばゆいばかりの光が放射され、辺り一面に七彩の放電が起こった。

「ぐう、アアア・・・」

身体のそちこちに激痛が走る。皮膚感覚が麻痺し、立っているのがやっとだった。

不意に、放電が止み、室内に静寂が戻った。

「はあ、はあ、はあ、・・・」

痛みから開放された途端、俺はその場に片膝をついた。空自の耐G訓練以来だぜ、こんなのは。

「おお！成功じゃぞ」

博士の声が思考の止まった俺の耳に飛び込んできた。

「博士、どうしました？おお、やりましたね」

「何だなんだ、・・・おお、かっくいい。成功ですね、先生」

次々に聞こえてくる歓声に、やっとの事で顔を上げると、観察窓の向こうに大勢の白衣が群がっているのが目に入った。

「大丈夫か、君？」

スピーカーで訪ねられた俺は、何回か首を縦に振ると、ふらふらと立ち上がった。

防爆窓に薄っすらと俺の姿が反射している。俺の姿が・・・。

えっ？俺のこの姿って！？

奇妙な違和感にとらわれて、自分の姿とガラスの像を何回も確認する。

「何なんだ、これは」

今度こそ俺は驚愕した。

「どうだ、すごいだろう」

御手洗博士の声が、室内に響いた。

「分子変換処理で作り出した、防護服だ。着心地はどうだね？」

「ま、まあまあ・・・です」

今度は壁に投影されたプロジェクター映像を見ながら、俺はやっとこさそれだけ答えた。

確かにすごい。俺の首から下は、赤と銀を基調とした派手なスーツに包まれていた。そう、まるで子供番組のヒーローが着るような。ご丁寧に、ブーツと手袋まで附いている。違いといえば、俺の都合はフルフェイスのヘルメットを被っていない事と服にでかかど【日の丸】が描かれている事だろうな。

「先生、肩の辺りはもう少し張り出した方がいいのでは？」とか、「ブーツはやはり白の方がかっこいいですよ」とか、向こうでは色々議論を交わしている。

その間じゆう、俺はボーっと突っ立ってるしか出来なかった。

「んじゃ、つぎ行くぞ」

いきなり博士の声がすると、背中で金属音がした。反射的に振り向くと、腹に衝撃が走った。吹っ飛ぶ直前に目撃したのは、マニピュレータハンドに握られた357マグナムだった。

「いててて・・・」

俺は腹押さえながらやっこの思いで立ち上がった。

「おい、だいじょうぶかあ？」

ちきしょう、大丈夫な訳ないだろう。至近距離からのマグナム弾の直撃に死ななかつたのは流石だけれど、衝撃はあんまり中和されてないぞ。

「よっしゃあ、上出来、上出来い」

くそっ、まだふらふらするぞ。どうせ防弾にするんだったら、耐シヨック機能も付与して欲しいもんだ。

「次行くぞ、次」

「ちょ、ちょっと待って・・・」

みなまで言わせず、次に襲って来たのは、なんと火炎放射機だった。

「アチアチ、アチチチチ」

勘弁してくれよ。服は耐熱かもしれないが、熱そのものはあんまり遮断されてないぞ。しかも、顔はむき出しなんだ。一体全体、人のことを何だと思ってるんだ。

「おー、すごいすごい」

俺のダメージを知ってか知らずか、窓の向こうでは歓声が沸き起こっていた。

その後夕方まで、機関銃の掃射やら液体窒素の直撃、果ては手榴弾まで、数々の耐久試験に俺は耐えぬき、やっとの事で開放されたのだった。

「やあやあ、よう頑張ったな。ご苦労さん。いいデータがとれたよ。そうじゃ、今日はもう帰っていいよ」

「ははは・・・。お、お疲れ様でした」

ふらふらしながら研究室を出ようとした俺は、はたと気がついた。「博士、これどうやったら元に戻ります?」

そうなのだった。俺はまだ真っ赤な『バトル・ジャケット』を着たままだったのだ。

分子変換処理された服には、着替えるためのボタンやファスナーの類が一切付いていなかった。

「ん、それかぁ・・・」

俺は、もしかするとまたあの恥ずかしい変身ポーズをしなけりやならないのかと内心冷や冷やしていたが、博士の返事はそれ以上に残酷なものだった。

「元に戻す方法ねえ。そうだなあ、そこまでは考えてなかったなあ」「えっ?」

「君の着てた服の繊維分子から変換したもんでなあ。元の服のデータがない事には戻しようもないし・・・。ま、今日のところは、それ着たままで帰りなさい。明日には何とかするから」

「・・・・・・・・」

あまりの事に、俺は去ってゆく御手洗博士の背中をただ黙って見

つめていることしか出来なかった。

実はこれ以降、更に悲惨な運命が俺を待っているのだが（少なくとも今日と同じくらいひどい目に会う事は想像できた筈だ）、この時はそこまで頭が回らなかった。

すーぱぁ大怪獣出現【2】

すーぱぁ大怪獣出現【2】

(3)

そいつは、ある日突然に現れた。

一体どこからやって来たのか、自衛隊の富士演習場のど真ん中に空中から染み出すようにフェードインして来たのだ。

そいつは、ジュラ紀の恐竜と昆虫に人間を加えてミキサーにかけたような姿をしていたが、分類学上そのどれにも当てはまるようには思えなかった。

『全長92.6m、全高33.2m、全幅28.1m、尻尾の長さ66.8m、推定重量4千5百38t、四肢ト尻尾部ヲ備エ通常ハ二足歩行ヲ行ウ、頸部ヲ経ズニ胴体ニ直接頭部ガ接続スル、頭部ニハ1対ノ眼球及ビ1個ノ複眼、7個ノ単眼、2対ノ巨大ナ牙ヲ備エタ口、3対ノ触覚、及ビ三本ノ角ヲ備エル、背部ニハ伸縮可能ナ6対ノ触腕ヲ備エル、触腕部先端ニハ3本ノ鋏状ノ爪ヲ備エル、前後肢ノ指ノ数ハソレゾレ7本、通常時ノ歩行速度35.6km/h・・』

『節足動物様ノ硬質外骨格ト脊椎ヲ含ム内部骨格ヲ併セ持ツ内外骨格生物、主ナ体細胞構成元素ハ、炭素、水素、酸素、窒素、硫黄、珪素、鉄、鉛、たんぐすてん、ちたにうむ、ぱらじうむ、もりぶでん、ソノ他、特ニ珪素ト重金属元素ノ含有量ガ通常生物ニ比べ異常ニ多イ、DNA/RNAヲ持タズ遺伝情報ハ珪素化合物ヲ中心ニ構成サレタ結晶核上ニ存在スルトミラレル、・・・』

『外骨格ノ主成分ハ珪素ト稀土類元素カラナルせらみつくういすかーノ網目状構造ト高耐熱有機高分子カラナル、内骨格成分ハ不明ダガ同様ノ構造ヲ持ツト推定サレル、・・・』

『細胞内ヤ体液中ニ磁性流体ヲ含ミ、体内発電ヲ行ッテイル様子、

ソノタメ周辺部ニ電波障害ガ引き起こサレテイル、体内発電ヲ利用シタ放電現象ヤまいくろ波、れーざー発振現象ガ確認サレテイル・・・』

『呼吸器官及ビソレニ類スル器官ノ存在ハ不明、周辺ノ酸素／炭酸ガス濃度ノ変化ハ極メテ微量、ソノタメ通常ノ生物ト同様ノガス交換ヲ行ッテイル可能性ハ低イ、・・・』

こんな大怪獣が何の前触れもなく突然空からわき出したら当然大騒ぎになるところだが、場所が富士演習場だったためとマスコミや周辺住民への情報管制が徹底されたため、パニックといった最悪の事態だけは避けられた。

『出現時ニオケル前兆現象（足跡、音声ヲ含ム大気振動、地底及ビ地表面振動、質量移動、熱量変動、電磁気的変動、大気流変動、各種ガスノ確認、放射線、ソノ他）ハ一切無シ、・・・』

こいつは、出現するや否や、辺りに散開していた戦車や装甲車、自走砲等を当たり次第に破壊しては乗務員諸共喰らっていった。

『食物トシテ人間ヲ含ム動植物ヲ摂取スルト同時ニ金属や岩石ヲ直接摂取シテイル事ガ確認サレテイル、一方排泄ハ一切確認サレテイナイ、ソノタメ食物及ビ消化器官等ノ形態ニ関シテノ詳細ハ不明、・・・』

とにかく、演習中の部隊が攻撃を受けたのには違いなく、その点で自衛隊は目標に対し武力で対抗する権利があった。もつとも、喰われないためには逃げ出すか戦って勝つかのどちらかしかないのだけれど、はたして幕僚本部の下した判断は後者であった。

《目標を武力により排除する、もしくは富士演習場内に留める事、そのために自衛隊及び関係機関は最善の策を取る事》

目標は【破壊鬼皇】と呼ばれている。何故なら、『頭部第一角基部ニ明ラカニ人工トミラレル付属物ヲ確認、長辺250mm、短辺85mmノ金属ぷれーとトちえーんヨリ構成サレル、すべくとる分析ヨリ材質ハ双方トモ鍛鉄ト推定サレル、ぷれーと部ニハ草書体デ【破壊鬼皇】ノ文字ガ確認サレタ・・・』からだ。

怪獣が漢字で書かれた名札をつけてるなんておかしい話だが、事実なのだからしょうがない。まさか、自分で書いたとは到底思えない。一体、いつ、誰が付けたのだろうか？

(4)

やつ、破壊鬼皇が現れてから十三時間後（その間、政府閣僚と自衛隊幕僚本部とでやつへの対処に関して会議がおこなわれていた）、自衛隊は武力行使、すなわち攻撃を開始した。

たまたま実弾演習のために、陸戦兵器に関しては富士演習場及びその近隣には平時では考えられないほどの戦力が集中していた。

一方、航空戦力は航空自衛隊と周辺の陸海の航空隊が駆けつけた。更に、駿河湾と横浜・横須賀から長距離巡航ミサイルが放たれ、誘導波に乗って飛来した。

攻撃開始からの十五分間は、中長距離からのミサイル攻撃に費やされた。が、爆煙が消えても破壊鬼皇は相変わらず醜悪なその姿を留めたままだった。

その後の二十五分は近距離での地対地ミサイルと砲撃が続いたが、それも効果がなかった。破壊鬼皇の周辺では局地的な磁気嵐が発生していて、ミサイルの誘導が効かなくなるのである。

そこで今度は、ようやく到着した爆撃機が活躍したが、やはり何の効果もなかった。それどころか、やつの背中から伸びる触腕と体節突起からの放電で、そのほとんどが打ち落とされてしまった。

次にとられた作戦は、航空機及びヘリコプターと戦車・自走砲による近距離精密射撃であった。目視と光学センサー、レーザー照準機を用いて、目・口や関節のような外骨格接合部などの比較的弱いと見られる部分への集中攻撃が敢行された。

が、なまじ接近してでの攻撃であったため、返ってやつの餌食になっただけであった。攻撃開始後9時間が経過しても、自衛隊は破壊鬼皇に何のダメージも与える事は出来なかった。ただし、やつを《富士演習場内に留めおく》事には辛うじて成功していた。その点で

は、自衛隊の攻撃は評価できたが、いかんせん被害が大きすぎた。そこで、幕僚本部は最後の賭けに出た。

破壊鬼皇も（我々のような）生物であるとして、毒物・薬物による攻撃に踏み切ったのである。C兵器は実際には使用してはならない事になっているが、日本が核戦力を所有していない事になっている点、またB兵器では後々の環境破壊に対する影響が大きすぎる点を考慮すると、これは最後の手段といえた。

破壊鬼皇が呼吸によるガス交換を行っているようなデータがなかったため、毒物を直接口から摂取させる方法と、濃硫酸・濃硝酸、フッ酸、強酸化剤の薬物噴霧の二つが採用された。結局のところ、青酸、テトロドトキシンなどの毒物は効果が無かった。フッ酸による攻撃が辛うじてやつの外骨格にダメージを与えた。

だが、我々は見落としていた。やつは破壊鬼皇なのだ。

戦闘開始から17時間後、自衛隊は投入戦力の65%を失い、人的被害は行方不明を含む死傷者数、2832名に及んだ・・・。

(5)

「ヤッホー、みんな!」

この非常時に陽気な声をあげてやって来たのは、情報戦略自衛隊未来研の責任者、御手洗博士である。

「先生、大変な事になりましたよ」

我々は口々に富士演習場での戦闘を説明しはじめた。モニタと情報パネルのデータを睨みながら、

「破壊鬼皇め、遂に出たか」

と御手洗博士は呟いた。

「やつめ、三十年前とそっくりそのままじゃわい」

「えっ？」

博士はやつを、破壊鬼皇を知っている。しかも三十年も前から。「当たり前じゃ。でなければ、たかだか数時間でやつに関してこんな詳細な情報が得られる訳がない」

そう言われてみればその通りだ。データにはサンプリングした細胞の分析や、体内の断層撮影、その他にも各種の解析が必要だ。とても出現してから2〜3時間で得られる類のものではない。だが、以前にもやつと遭遇しており、その時のデータが残されていれば・・。

「よし、葵君、出番だぞ！」

博士はニヤリと笑うと、俺に声をかけた。

「で、出番って・・・」

俺は何の事やらさっぱり分からなかった。

防衛省の秘密部門とはいえ、たかが一研究室に何が出来ると言うのだ。まさか、例の『バトル・ジャケット』であの大怪獣と戦えとも言うのだろうか。

「いいから来なさい」

博士は俺の心の内の事などお構いなしに、強引に階下の工作室へ引張って行った。

「ほうら、こっちだ、こっち」

工作室からエレベーターで更に階下へ下りると、そこは見た事もない巨大な部屋だった。この建物にこんな空間があるなんて、今まで聞いた事もないぞ。

「葵君、来たまえ。君に見せたいものがある」

博士の手招く方に向かうと、そこにあったのは、・・・

「どうだ。これが『高速戦闘機メタモファイターJ-1 クウジエイ』だ」

見た事もない形の大型メカであった。戦闘機といえばその様にも見える。少なくとも翼と推進エンジンを備えたそれは、カテゴリー的には航空機であるらしかった。しかし、

「博士、これって、・・・本当に飛ぶんですか？」

俺は心に浮かんだ疑問を投げかけた。それほどにこのメカはみようちきりんな格好をしていたのだ。どう考えても航空力学的に無理がある。

「何を言つとるかね。大丈夫じゃ。これさえあれば、やつも敵ではない」

「やつって、・・・あのでっかいのしょうか」

「決まってるじゃないか。わしが三十年間研究し続けた『対破壊鬼皇兵器 ジエイダー・システムじゃ。絶対に負けっこない』

博士が自信満々で語るほどに俺の不安はいや増しにつのって行った。

「でも、核以外のあらゆる攻撃が効かなかったんですよ。こんな戦闘機一機くらいを投入しても無駄なんじゃ・・・」

「一機ではない。ジエイダーはこのクウジエイの他に『高速戦闘巡視艇 カイジエイ』と『巨大戦車 リックジエイ』を加えた三機が連携プレーを行う事で初めてその性能を示せるのじゃ」

博士の指差す方には更に二台の大型メカが鎮座していた。だが・

「博士く、富士演習場は海岸からは遠すぎますよ。戦闘機や戦車はいいとして、巡視艇はどうするんです？破壊鬼皇のデインジャー・パルスで巡航ミサイルは中りませんよ」

俺はなおも食い下がった。『バトル・ジャケット』以来、御手洗博士の作るものを使って無事で帰れた事なんて一度も無い。こんな得体の知れないメカで出撃して、大怪獣と戦えるわけが無い。

「大丈夫じゃ。陸戦時にはリックジエイでカイジエイを牽引する。

逆に海上戦闘ではカイジエイが引張る。何の問題もありゃせんわい」
うっ、嘘だ。何の問題もないわけがない。

「何をやつとるか。さっさと乗り込め。おまえさんも元空自のパイロットじゃろう」

くっ、痛いところを突いてきやがる。俺だって、好きでこんな変なおっさんとヒーローごっこをしてる訳じゃない。機会があれば、また戦闘機乗りとして活躍したいと思っていた。

「確かにジエイダーは破壊鬼皇を倒すための兵器だが、それもこれもおまえさんのような優秀なパイロットが操縦してこそじゃ・・・

じゃが、確かにやつは強い。こいつらを使っても本当に勝てるかどうか……。いや、生きて帰れるかどうかものう……。済まんかった。許してくれ。わたしには君に無理強いしてまで危険な戦いに巻き込む権利はないからのう。……。やつは、わしがなんとかしよう。わしが操縦して……」

「待って下さい」

メカに乗り込みかけた博士を俺は思わず呼び止めた。振り向いた博士の顔は、苦悶に歪んでいるようにも、笑いを抑えている様にも見えた。

「もうこれしか方法がないんじゃない。自衛隊の通常戦力では破壊鬼皇は倒せん……。わしがやらねば誰がやるのじゃ。三十年前の繰り返しにはせん。」

博士の決意は堅いようだった。だが、

「俺が乗ります」

何となくはめられたような気がするが、ここで黙って行かせたら男じゃない。

「博士も言ってたじゃないですか。俺みたいな優秀なパイロットじゃないと、満足に動けないんでしょう。やつは俺が倒します」

い、言ってしまった。もう引っ込みがつかないぞ。だが、なぜだか俺は後悔していなかった。また戦闘機に乗れる。戦闘機に……。これが戦闘機ねえ。ちよつとだけ不安だ。

すーぱぁ大怪獣出現【3】

すーぱぁ大怪獣出現【3】

(6)

15分後、俺は戦闘機クウジエイのコックピットにいた。基本的には単座の戦闘機と変わらないようだが、風防ガラスの代わりに三次元モニタパネルが外界を映していたり、どう考えても航空機の操縦には関係ないようなハンドルやレバーがそこらじゅうから生えていた。

＜時間がないから操縦法などは無線でレクチャーする。いいな＞
ヘルメットに御手洗博士の声が響いた。

「了解」

＜空を飛ばすぶんには、空自のNF-1と変わらん。これは発進時に教えた通りじゃ。武装システムが半自動になつとる。わかるな＞

「わかります」

＜わしらは、ヘリで空輸されるんで多少送れるが、それまで持ちこたえてくれ＞

「了解。何とかがんばります。・・・目標まであと一分。ブースター切り離します。・・・3, 2, 1, ・・・ブースター切り離し完了。・・・目標を黙視で確認。指示を」

＜よっしゃ。カイジエイの索敵・警戒システムによると、やつは出現地からほとんど動いておらんようだ。まず、やつの様子を見るんだ。ただし、十分注意しろ。挑発はしてもいいが、打ち落とされるな＞

「了解」

俺は、久しぶりの空を楽しんでさえた。カタパルトで発進した時のGもむしろ心地よかった。大怪獣を目の当たりにしても、恐怖

はなかった。冷静な判断と、熱い闘志の入り交じった妙な感覚が俺の中に蘇ってくる。

やつはでかい図体を平地にさらしていた。今となっては何をしても無駄ということなのか、自衛隊の戦車が何もせず遠巻きに眺めているだけだった。俺は、やつへ急降下をすると、鼻先をかすめて再度急上昇をした。重圧でシートに押し付けられる。

と、突然アラームとともに赤い矢印の点滅がモニタパネルに現れた。後方を指している。次の瞬間、パネルに小さなウインドウが開いて、後方から迫りくる触腕を映し出した。

俺は巧みな操縦で、間一髪でこれをかわすと、上空で急旋回した。
＜大丈夫か、葵君＞

「大丈夫です」

＜やつめ、移動を始めたぞ。今までの相手とは違う事がわかったようじゃ。気をつけろ＞

「わかってます」

＜よし。後、十分ほどで到着する。それまで、やつをそこから外へ出すな＞

「了解。攻撃を開始します」

＜無理はするな＞

「了解」

俺は、武器の安全装置のロックを全て解除すると、再びやつに急降下していった。

トリガーの押された瞬間、対地ミサイルの自律式慣性誘導装置にデータが叩き込まれ、青い炎を吐いて放たれる。やつの鼻面に当たると思った瞬間、ミサイルは自爆していた。

強烈なマイクロ波パルスが、寸前、ミサイルの起爆装置を作動させたのだ。当然、やつにダメージはない。

だが、俺が狙ったのはそうじゃない。1秒遅れてやつの足元で大爆発が起こった。ミサイルは2つの目標に時間差で放たれていたのだ。直撃ではなかったが、破壊鬼皇は爆発によってその歩みを止め

た。

旋回するクウジエイを睨み付けるように身体の向きを変えると（やつには首がない）、大地も震えんばかりの大音響で吠えた。

俺は再度、ミサイルを放った。今度は直撃した。

「やったか？」

だが、やつの装甲外骨格は焦げたような痕をみせるのみで、ダメージを受けたようには見えなかった。上昇にうつる機体に、再度腕が襲ってくる。

「くそ、これじゃ埒があかない」

俺は舌打ちした。やはり通常兵器では破壊鬼皇には太刀打ちできないのか・・・。

＜葵君、『シルエット・チェンジ』だ。左手パネルのレバーをFからSへ切り替えろ＞

「へ？シルエット・チェンジって、・・・何ですそれ」

＜いいから、やるんだ。左手パネルのレバーをSにして、『チェンジ・ジエイダー・シルエット』と叫ぶんだ＞

「えっ。またですかあ。別に叫ぶ必要はないんじゃないですか？」

＜誤動作を避けるための音声入力だ。起動後のポーズはバトル・ジヤケットと同じだ＞

「な、な、なんでポーズをつける必要があるんです？」

＜タイミングをとらんと上手く起動せんぞ。とにかくやれ＞

何がなんだかわからんが、ここは言う通りにした方がいいようだ。

「チェンジ・ジエイダー・シルエット！」

叫ぶと同時に、俺はレバーを切り替えた。突然機体がうなりをあげると、コックピットが90度回転し、両手両足にレバーが絡み付いてきた。

「わわ、何だなんだ」

正面パネルの機体状況モニタの絵が変わりつつあった。翼が折りたたまれ、機首が回転・伸縮して収納されていく。重力方向や加速度的変化で、俺は実際にもモニタの通りに変形が行われている事を

知った。

ジェット噴射口が機体上面にせりあがり、代わりに2本の長い足が機体後方に伸びる。そのまま、機体は垂直に傾くと、もと機首のあった部分に頭部が跳ね上がった。両脇から腕がせり出して瞬時に伸びると、先端から握りこぶしが飛び出す。腰のジョイントが伸び、軸を中心に180度回転した。大腿部が伸長しきると同時に、爪先とかかどが折れ曲がる。変形開始から十数秒で戦闘機は人型ロボットの姿になってしまった。

＜何をしている。早くポーズを決めんか。一連の動作を運動コンピュータが読み取って、各駆動部のサーボモーターやリニアシリンダの磁気圧の最終調整が行われるんじゃ。早くしないと落ちるぞ＞

「ええっ。それを早く言って下さいよ」

＜さつきから、やれと言っとなるぞ。ポーズを決めたら『ジェイダー』と叫ぶのを忘れずにな。起動変換プログラムの最終パスワードだ＞

「わわわ、了解」

俺は慌ててバトル・ジャケットの装着ポーズを決めると、叫んだ、
「ジェイダーーーーーー！」

突然、両手両足が重くなったかと思うと、次の瞬間何も感じられなくなった。

いや、何か力がみなぎるような、自分が巨人になったような感覚が全身に行き渡っていた。

＜いかん、地面に激突するぞ！＞

はっと、気がつくのと地上が間近に迫っていた。モニタ画面にポップアップした状況表示ウインドウの数字が急速にカウントダウンして行く。地面まで、もう10メートルもない。

だが、クウジェイ、いやジェイダーは地面に激突はしなかった。

まるで飛び箱からでも飛び降りたように、ジェイダーの機体は、・・

・いや、俺は地表にふわりと着地していたのだ。

そうだ、このロボットの機体がまるで自分の身体のように動く。

俺は自分の両手を目の前に持ち上げて眺めた。同時に巨大な機械の

腕が持ち上がるのが、モニタにも映し出される。

<葵君、危ない！>

ヘルメットに声が響くのと、モニタに赤ランプの点くのとどっちが早かったろう。眼前に迫りくる触腕を、俺は横つとびに飛んで難無くかわした。

<大丈夫か？>

「はい。・・・すごいです、これ」

<当たり前じゃ。わしが作ったんだぞ。ジェイダーのサーボスレイヴ・システムは君の動きを遅滞なく機体に伝えるんじゃ。君は今、ジェイダーそのものじゃ。行け！破壊鬼皇を倒すんじゃ>

「了解！！」

俺は、破壊鬼皇にダッシュした。二本の触腕が俺をめがけて迫り来る。俺はそれらを難無くかわすと、やつの懷に飛び込んだ。目の前に巨大な胸板が聳えている。

「で、でかい・・・」

一瞬、躊躇したところへやつの右腕が振りおろされる。

「うおおおおお！」

左手で受け流すと、俺はやつのどてっばらにパンチを繰り出した。バガガガガッ

”キシャー”

破壊鬼皇が悲鳴をあげた・・・様に聞こえた。

<いけるぞ、『ジェイダー・パンチ』だ！>

「おう、ジェイダー～～、パ～～ンチ！」

ドゴン！！

ものすごい音がして、俺のパンチがやつにヒットした。あの破壊鬼皇が一步後じさる。すごいぞ、さっきのパンチとは比べ物にならない。

「もう一丁」

パカ・・・

「あれ？」

今度もヒットしたのだが、さっきのより手応えが無い。何故だ？
＜いかん、来るぞ！＞

ベシッ！

「ぐあああああ」

やつの左腕に、ジェイダーは数十メートル以上も吹っ飛ばされてしまった。

＜大丈夫か？ 損傷は？＞

俺は頭を振りつつ立ち上がると、モニタを見た。ジェイダーの機体が描かれた図が表示され、ダメージ箇所矢印と説明が次々に表示される。総合評価は『損傷軽微』であった。

「だ、大丈夫みたいです。ですが、どうしてパンチが効かなかったんです？」

＜ちゃんと『ジェイダー・パンチ』と叫ばないからだ＞

「へ？」

＜何回も言うところが。こいつらは音声入力が必要なんじゃ。ジェイダー・パンチの出力は普通のパンチの35%増しじゃ＞

「そんなややこしい事せずに、最初からパンチのパワーを最強にしたいって下さいよお」

＜馬鹿者！ そんな事したら、ジェイダーの腕がすぐにぶっ壊れちゃうぞ＞

「あ、そうか。確かに・・・」

＜ジェイダーの操縦系では、レバーやスイッチ類が使えんからのう。パワーコントロールや武器管制を音声入力で補つとるんだ。わかつとるのか＞

「りよ、了解」

言われてみれば、その通りだ。巨大なジェイダーに目の前のボタンを押す真似までトレースさせるわけにはいかんだろう。第一、組み合ったら最後、両手が動かせない。

＜ちなみに、気合を入れるとパワーは15%増しじゃ＞

「了解！」

俺は再びやつに突進した。触腕も迎撃に来る。

「とう！たあ！」

今度は手刀（115%パワーだ）で払い落とす。

「ジェイダー・パ〜ンチッ！」

バキッ！

今度こそクリーンヒットだ。やつが一瞬前のめりになる。

「ジェイダー・キィ〜ック！とお！！」

すかさず、側刀蹴りを叩き込む。計算通りなら35%増しの更に15%アップだ。

ズゴーン

破壊鬼皇が腹を押さえて後じさった。行けるぞ。

「よし次は・・・」

次の技を出そうとするところへ、やつの右腕が振りおろされた。

すかさず俺は、両手を交差させてそれを受け止めた。音声入力も忘れない。

「ジェイダー・十字受けっ！」

ガシャーン

「うわっ」

俺はその場に片膝をついた。なんてパワーだ。

くすまん。『十字受け』はコマンドに無いんだ>

「そ、そんなあ〜」

くその代わり、『ジェイダー・クロスガード』ならあるぞ>

「おんなじじゃないですかあ」

く馬鹿言え。『十字受け』より『クロスガード』の方が、かっこいいじゃないか>

ちきしょう。この爺さんは何考えてるんだ。

ミシミシ・・・

ジェイダーの強化フレームが荷重に耐え切れずに悲鳴をあげ始める。くそっ、こうなったら自棄糞だ。

「ジェイダー・ミサイイイ〜ルッ」

ズバババババツ

やった、出たぞ。ミサイルはコマンドに存在しているようだ。
ドゴゴーン！

至近距離でのミサイル攻撃に、流星の破壊鬼皇も一瞬たじろいだ
ようだ。荷重が弱まる。コマンドが有ろうが無かろうがこの際何で
もいいから、とにかく一旦後退だ。

「アフターバーナー点火、急速離脱」

ジェイダーの背中には、クウジェイの時のジェットノズルが剥き
出しになっている。

俺の想像通りジェットエンジンが火を噴き、ジェイダーを空へ導
いた。

「やった、成功だ」

と、思ったのも束の間、ジェイダーのボディーに破壊鬼皇の触腕が
幾重にも巻き付いた。

「し、しまったあゝ」

と俺は叫んだ。実はこんなことを叫ぶ必要はないのだが……。癖
になってしまったらしい。ううう、我ながら情けない。

ギギギギギ……

さっきよりも嫌な音がコックピット内に響き渡る。返って事態は
悪化したようだ。モニタ画面に赤ランプが点滅する。

「くそっ。もう一度、ジェイダー・ミサイル！！」

………

出ないっ。何故だ……。えっ？弾切れだとー。そんなのありか
あ。テレビで見たロボットは無限にミサイルを打ってたぞ。もうダ
メか……。、

すーぱぁ大怪獣出現【4】

すーぱぁ大怪獣出現【4】

(7)

もうダメかと諦めかけた時、

ドグワァガーン

ものすごいショックが大音響と共に襲ってきた。と同時に辺りに土煙が立ちこめる。

「何だなんだ、何だ」

モニタにメッセージが目まぐるしく表示される。外部応力を示す数字が急速に減少する。

《今だ、葵!》

ヘルメットで声がすると同時に俺は叫んでいた。

「ジエイダー、フルツ、パワー〜」

エンジン出力が一気に臨界まで上昇した。俺も力を振り絞って、やつの触腕を振りほどくと、後方ヘジャンプした。

そこへ間髪を入れず弾幕の援護が来た。後ろからキュラキュラとキャタピラ音を響かせながらやって来るのは、

「リックジエイ! 来てくれたのか」

くすまん。遅くなった>

上方からもミサイルが降って来る。リックジエイの更に後方に位置する、カイジエイからのものだ。

《ここは自分に任せて、君はカイジエイまで後退するんだ》

「波多野先輩!」

くいかん! 高エネルギープラズマ反応じゃ。パルサー・カノンがくるぞっ>

はっとして前を見ると、破壊鬼皇の口腔に青白い火球が火花を散

らしながら浮かんでいた。見る間にも大きく膨らんでいく。あれをぶつけられたら・・・

《葵、『ジェイ・ランチャー』だ。受け取れ》

ボンツと音がして隣のリックジェイから、巨大なライフル型の大砲がはじき出された。御丁寧に引き金やモードセレクタ、安全装置のつまみもでっかいのが付いている。

俺は空中のそれを引っ掴むと、肩付けで照準を合わせ、射撃姿勢に入った。親指でセーフティを外すと、モードを切り替える。

「セーフティロック解除、ジェイ・ランチャー精密射撃モード。出力82%、光源誤差0.2」

別に声にする必要なんてないんだ。ないんだけどね・・・。

＜誤差修正右一度、上下角マイナス三度＞

《急げ、来るぞ！》

”ブワクシャファアアアアア”

「ジェイ・ランチャー、発射」

くしゃみをするような鳴き声と共にプラズマ火球が放たれるのと、引き金を引いたのはほぼ同時だった。

ドグワァーン、バリバリバリ

我々と破壊鬼皇の中間で大爆発が起こった。俺は狙い変わらずやつ放った火球を打ち抜いたのだ。強電磁シャワーが発生して、一時的に外部センサー・モニターがブラックアウトする。

「うおー」

《わぁー》

”グギャー”

爆風を受けて流石の破壊鬼皇も吹き飛ばされてしまった。こっちは予想していた分ダメージは少なかったが、それでもカイジエイまで後退してしまった。

＜葵君、波多野君、大丈夫か？＞

「何とか・・・。しかし、波多野先輩が乗ってるなんて」

波多野三尉は防大での先輩である。陸自で戦車に乗ってた筈だが。

《こっちも大丈夫。全システム異常無し》

「今のでやったでしょうか？」

《こっちが無事だと言うことは、向こうさんはピンピンしてるって事だな》

＜その通り。やつはまだ弱つとらん。前方2800m、来るぞ＞

”クルルルルルルウウウー”

彼方で立ち上がった破壊鬼皇は、全ての触腕をこちらに向けていた。モニタに拡大映像のウィンドウが開く。触腕の先端部の鋏が大きく開き、中央の穴が淡い光を放っている。

《何をする気だ？》

”ピーー”

口笛のような泣き声と共に、触腕から無数の小片が発射された。それは、まるでミサイルの様に、着弾と同時に火花をあげて爆発を繰り返した。

「わああああ」

＜いかん。弾幕を張れ＞

《ちきしょう。なんてやつだ》

＜高速の渦巻状磁性流体に封じ込めた熱核プラズマだ。そいつを磁気圧で打ち出しておる。原理的にはリニア・カノンと同じじゃが、弾が生半可じゃない＞

何割かは、途中で打ち落としたものの、ジェイダー・メカの周囲のあちこちで爆発が繰り返されている。

＜このままじゃ、装甲が保たんぞ＞

「援護頼みます」

《何する気だ、葵。無茶は止せ！》

構わず俺はジェイダーをジャンプさせた。

「ジェイダー・ジャンプ、とう」

空高く舞い上がると、ランチャーを高速連射モードに切り換え、上空から破壊鬼皇を掃射したが、この程度では全くダメージにはなっていない。やはり、『ジェイ・ランチャー』と叫ぶべきだったろ

うか・・・。

逆に俺の方がやつの『ミサイル』の目標にされた。触腕が上空に向きを変える。だがその時、やつに一瞬の隙が生じた。

「今だぁ」

<よし、『超電磁結界針』射出。マグネティック・ホールド、スイッチ・オン！>

カイジエイから放出された8個の小型メカが、破壊鬼皇を取り囲むと強烈な電磁力場を形成し、やつをその場にしばらくつけた。

<<くらえっ、150mm重粒子加速砲、ファイヤー>>

轟音と共に、リックジエイから重原子核ビームが放たれた。動けない破壊鬼皇に直進する。だが、やつにビームが直撃する寸前、さつきとは比べ物にならない大爆発が起こった。

<<ちくしょう。やつめ、葵の真似をしやがったな>>

<じゃが、至近距離じゃ。今度は効いてるぞ。見ろ>

爆発で出来たクレーターの向こうに立ち上がった破壊鬼皇の外骨格は、所々がひび割れて白煙を吹き上げていた。

<チャンスじゃ。行くぞ、『グレート・シルエット』じゃ>

<<おう。>>

「おう、・・・って、何です、それ？」

<ちゃんと聞いとれと言っと思ったじゃろうが、もう>

「聞いとれも何も、初めて聞きますよ、それ」

<お？そうだったかのう。すまんすまん。『グレート・シルエット』とはのう・・・ボソボソボソ・・・、んでもってな、・・・ボソボソ・・・>

「そっ、そんなことが可能なんですか！」

博士の言葉に俺は呆気にとられてしまった。一体、この爺さんは何を考えているのだろうか。本当にそんな事が可能なのだろうか？

”フシユルルルウウウウ”

しまった。込入った話をしている間に、破壊鬼皇が復活してしまった。破損していた装甲外骨格も、元通りに復元してしまっている。

《いかん、破壊鬼皇が・・・》

＜おう、すまんすまん。これからいいとこなんじゃ。もちっと待つ
といてくれんかのう＞

”ルルルルウ・・・”

やつは低くうなりをあげただけで、おとなしくなっちゃった。

もしかして、こいつら友達じゃねーのか。

＜よっしゃ、ぐずぐずせんと気張ってチェンジいくぞ＞

《おう》

「お、おう・・・」

＜よし。じゃあ、手筈通りにシルエット・チェンジじゃ。最後が肝
心じゃからのう。みんな間違えるなよ。特に葵君、君が要だからな。
わかつとるな＞

「は、はあ」

実際、俺には自信がなかった。上手くいっただとしても、結構恥ずかしいぞ。

＜よっしゃ。そんじゃ、ま、いくぞ。せえゝのっ

「＜＜チェンジ・グレート・シルエット＞＞」

俺達は声を揃えて叫ぶと、アクションに入った。

「とう」

ポーズを決めた後、俺はかけ声（実際のところ本当に必要なのだろうか？）と共にジェイダーをジャンプさせた。空中でも派手にポーズを決め、腕を大きく広げた姿勢をとる。

モニタ上にプログラム起動のメッセージが現れ、変形に入る。

カイジェイとリックジェイも、ホバーノズルを噴射させ上昇をはじめた。いいなあ、あいつらはスイッチとレバー操作でいいんだからな。上空でジェイダーに並ぶと、続いて変形に入る。

うーん、ここでバックにテーマソングなんかが流れていると気分が出るんだけどなあ。

♪チャンチャラ〜〜、ゆけーゆけージェイダー♪日本の国を守るため〜

そうそう、こんな感じで・・・

♪チャチャチャ、そーらを飛ぶ、クウ・ジエイ、♪海を行く

な、なんじゃこりゃあ。どっから聞こえてくるんだ。

各ブロックが折り畳まれ、両足の付け根が胸まで移動したジエィダーは、ほとんどやじろべえのような形になった。その間にも、奇妙な歌は大音響で響いている。

「いったい何なんだ、この歌は？」

くほっほっほっ、なかなかいいじゃろう。わしの作詞じゃぞ>

《ちなみに作曲編曲は自分です》

な、何なんだこいつら。もしかして俺は悪い夢を見てるんだろうか・・・。

♪♪ぼくらの力、♪チャラチャッチャカチャ♪、

大和魂見せてみろ、チャチャチャー♪

歌が鳴り響く間にも、カイジエイが変形を終え、元ジエィダーを上部に飲み込む。その下部には、前後に伸長して腰部と脚部を形成したリックジエイが接続された。左右に広がったジエィダーの元脚部が折れ曲がり肩から腕を形成する。その先端に、元リックジエイの両脇に接続していた円筒がはまり込み、拳になった。

ワンコーラスがすむころには、三機の変形とドッキングが終了していた。最後に、ジエィダーよりも一回り大きな頭部がポップアップする。

<各部接続、ロック確認。エネルギー伝導ライン接続完了。各部センサー、モードGへ移行。通信・情報ライン、ワイヤードへ・・・接続終了。エンジン制御モード、レベル3へ。・・・最終制御プログラム起動。いくぞ、せいのつ、>

<「《防衛三体合体っ!」>»

「グレト・ジエィダー、マキシマムッ!!」

最終起動プログラムへ、運動パターン・パラメーターをインプットするための一連の動作を行い（本当に必要なんだろうな）、起動

パスワードを音声入力（本当の本当に必要なんだろうな）すると、
局地戦用重機動破壊機兵ハイパー・サーボスレイヴ グレート・
ジェイダー・マキシマムが完成した。

「やったぞ。かっくいいー」

《博士、とうとうやりましたね》

「うーん、やっぱり最後はシンプルに『三体合体』とした方が良かったかのう？」

《自分は、『防衛合体』の方が好みですが》

「ちょっと、どこだったかのう。後で確認しような」

《はい。中井三尉がビデオに撮ってくれてるはずですので》

「おお、そうじゃったそうじゃった。わしの分と、・・・そうそう、
葵君の分もダビングしとく様に頼んでくれたまえ」

《了解しました。葵、MP EG 2でいいな》

「はぁ・・・」

こいつらは何か勘違いしてないかぁ。俺達は破壊鬼皇を撃退する
ために・・・、そうだ、やつはどうしたんだ？

「ケテリ、リッリリ、リリリ」

破壊鬼皇は先程と変わらぬ位置に立っていた。何か不満そうに鳴
き声をたてている。（間違いかもしれないが俺にはそう聞こえたん
だ）

「おおっ、すまんすまん。待たせたな。さて、続き、いこうかぁ」

「ルリリリリ」

何となく会話が成立している様にみえるなぁ。まさかとは思うが、
こいつらはグルなんじゃないか？

「<行け、グレート・ジェイダーのパワーを見せてやれ>

「お、おう」

言われるままに、俺はグレートを前進させた。何となく身体が重
いな。三体合体で、でかくなった所為かな。

破壊鬼皇も地響きをあげてこちらに向かって来る。

「<やれ。グレートのパンチは、ジェイダーのキックと同じだけの威

力があるぞ>

そりゃそうだ。こいつの両腕は、元々はジエイダーの足じゃないか。俺は、グレートの巨大なパンチをくりだした。破壊鬼皇の方もパンチで応戦して来る。

「なんの、くられ、ジエイダー・パンチッ！」

<あつ、すまん。合体時のコマンドは『グレート・パンチ』なんだ>

「えゝゝゝ、そりゃないですよ」

なげた時にはもう遅く、やつのパンチがグレート・ジエイダーの腹に決まった。

<うおおお、ふんばれ。脚部、出力アープ>

「おう。今度こそ、『グレート・チョップ』」

”キシャシャー”

両者の戦いは周囲に小規模の地震を発生させていた。周辺を取り囲んでいた陸上自衛隊の戦車隊が、後退していく。

<くっそう。このままじゃ埒があかないぞ>

<その通りじゃ。グレートの連続戦闘可能時間は32分17秒。いったん離れろ>

「了解」

俺は破壊鬼皇に膝蹴りをかますと、その隙にグレート・ジエイダーを後退させた。

<葵、両腕を上げろ。『ナックル・バスター』を使うぞ>

「了解」

俺は両腕をやつに向けて水平に持ちあげた。

「ナックルバスター、射出準備完了」

・・・。

「先輩、早くスイッチ入れて下さいよお」

<へ?・・・ああ、すまんすまん>

<葵くゝん、だからちゃんと叫んでくんないやあ。タイミング取れんでしょ>

「えゝゝゝ、またですかあ。しょうがないなあ。・・・先輩、いき

ますよお、ナツクル・バスター！」

《おし、ポチッとな》

多少手間取ったが、やっとのことで『ナツクル・バスター』（平たく言うとならぬ口ケツトパンチであるが、違いと言えはこっちはほとんど手首だけで飛んでいくことだ）が、発射された。

両の手首のうち、一個は弾かれたが、残る一個は破壊鬼皇の右肩を砕いた。

「やったぜ！」

よしこのまま一気に勝負を・・・と、そうか、まだ手首が戻って来てないぞ。

＜ああ、すまんすまん。『ナツクル・バスター』の射出速度は、最大マッハ3.1なんだ。今なら掛川あたりかな。内部プログラムで旋回して戻ってくるには、後5分くらい待たにゃあならんな＞

な、なんじゃそりゃあ。まるつきり使いモンにならないじゃあないか。

《腰部シンクロン砲、砲門開きます。目標、1200m。出力72%。高速連射モード》

「砲撃姿勢、取ります。発射いつでもよろし」

＜ようし、シンクロン砲、連続射撃90秒。発射ー！＞

《発射》

”フルギヤラララー”

・・・15分後、互いに飛び道具で傷だらけになった二つの巨体の周りを、無数のクレーターと巻き添えになった戦車の破片が取り巻いていた。

《ジェネレータ冷却水温度、12.6℃アップ。グレート・ジェイダーの戦闘稼働限界まで、後8分41秒》

＜まずいなあ。よし、とっておきの必殺技で一気に決着をつけるぞ！＞

《了解》

んなモンがあるんだったら、最初から使えよなあ。てめえらは、椅子に座ってボタン押したり文句言ってるんだけど、・・・俺はなあ、俺はあいつと延々殴り合いやら撃ち合いをやってたんだ。なめんなよお・・・などとは口に出さず、

「了解、指示願います」

ううう、軍隊って命令系統には逆らっちゃいけないんだよね。

<波多野君、『ハイパー・ジェイ・ソード』を使うぞ。スタンバイじゃ>

<<了解。葵、右膝から剣を出すぞ>>

「了解」

俺は、膝から飛び出した柄を握ると、巨大な剣を引き出した。両手正面に構えると、刀身が更に伸長した。

<<葵、チャージアップだ！>>

「了解。チャアアアジッ、アーッップ！」

俺はソードを大上段に振りかぶった。

<パスワード確認、チャージアップ、プログラムスタート>

<<全リミッター解除、安全弁閉鎖。ジェネレーター出力無制限、パワー急速上昇中>>

<ブレードに熱核プラズマコーティングを開始。臨界まで約18秒>
<<目標も『超振動EMシェイバー』を発生。エネルギーレベル急速上昇！>>

こちらが剣を取るのを見てか、破壊鬼皇の両手からも輝く長剣が伸びた。やつも次でカタをつけるつもりらしい。

<いけえ！『ハイパー・ジェイ・ソード・絶対防衛切り』じゃ>

ダッシュしようとした俺は倒けそうになった。またかよお。

「あのお、それって大声で叫ぶんですよね・・・」

<当然じゃ。この音声入力によって、瞬間的に膨大なエネルギーをソードと駆動系に与えるんじゃ。手動ではタイミングが取れん>
・・・本当かなあ。無理矢理そういうプログラムを組んでんじゃないのかあ。しかし、この場合は信じるしかない。

「いやああああ！」

気合いと共に（これによって更にパワーアップされる筈だ）俺は破壊鬼皇目指して突進した。

やつも、光剣を振りかぶって迫ってくる。俺は渾身の力を振り絞り剣を振り降ろすと共に、声を限りに叫んだ。

「ハイパー・ジエイツ、スウオーードッ、絶対防衛ッ、切りいいいっ！」

”ヒュテュリユリユリユリユユユユユッ！！”

破壊鬼皇も何かの技を使ったようだった。

そして・・・

すーぱぁ大怪獣出現【5】

すーぱぁ大怪獣出現【5】

(8)

全エネルギーを使いきってグレート・ジェイダー・マキシマムはその場に各座していた。

対する破壊鬼皇は、左胸に巨大鋼剣を生やしたまま立ち尽くしていた。肩から胸にかけての切り口から青黒い煙が吹き上げている。両腕を力無く垂らし、背部で触腕が痙攣のように震えている。

「やったのか？」

勝ったとは思わない。だが、せめて相打ちには・・・

くくそつ。エネルギー残存量0・18%。メイン・ジェネレーターは完全にオーバーヒート状態>

「両腕リニア・シリンダー、過剰磁気圧により変形、使用不能」

《腰部サスペンション、油圧低下。右膝関節、粉碎。サブ・ジェネレーター出力、辛うじて30%を維持。二次コンデンサー、電圧低下・・・これじゃ動くこともできんぞ》

くぬううう、冷却水が漏れとる。やっぱ、出力が過剰だったか・・・>

状況確認が続く中、俺はモニターに映るひび割れだらけの破壊鬼皇をじっと見つめていた。こいつは何の為にこんなところに出て来たんだろうか・・・

くな、何いつ。電磁場脈動振動数が上昇を始めた。やつがまた動き始めるぞい>

目前の破壊鬼皇の外骨格から吹き上げる煙が、青から白色に変わった。同時にひび割れから緑の液体が吹き出し体表をおおい始める。胸のソードも徐々に体内に吸収されていってる。

「なんてやつなんだ・・・」

外骨格の破片を撒き散らしながら、破壊鬼皇はこちらに歩み寄り始めた。

やつが一步足を進める度に、復元しかけた外郭は再びひび割れ、崩れ落ちる。

が、それをものもしない姿は、正に破壊の皇かも知れなかった。「カイジエイ側のジョイントを強制解除して、クウジエイだけでもボルトアウト出来ませんか？」

＜無理じゃ。ジエイダー側の脚部ピストンが動作不良を起こしとる。これではメタモルファイターへもサーボスレイヴへもチェンジ出来ん。第一、射出するだけのエネルギーがもう無い。波多野君、マニュアルでそっちの火器だけでも使えんか？＞

《リックジエイも右足側は全く言うことをききません。左側の加速砲もシンクロン砲も、今のサブジェネでは出力不足で撃てないし、ミサイルは誘爆防止リングがロックして使用不能》

＜万事休すか・・・＞

負けた、というよりも『防ぎきれなかった』という事が、俺は悔しかった。何処まで行っても俺は自衛隊員なのだ。このままこの国がやつに破壊されるなんて・・・ちきしょう。

その時、やつの動きが止まった。

それも、びくっと、・・・そう、まさに人が何かに驚いてびくっとするような仕草をした後、固まってしまったのだ。

そして俺は見た、やつの足元でひらめく白いワンピースを着た少女の姿を。一体いつからそこにいたのだろうか？ここは、ついさっきまで戦場だったのだ。女性がひとりやってこれる筈はない。

幻か？それとも・・・

一ハツキイー、もう、こんなところで何やってるのよお。

長い髪の女性が告げると、やつはおずおずと彼女に向き直り、低くうなった。

— いい訳なんかするんじゃないの。

” キュヒュヒュウウ・・・”

— いい、今日はご飯抜きだからね。

” リュリイ、リイリイイイ”

— だめです。帰るわよお。それとも、お仕置きの方がいい？

” リリリリリリイイ、・・・ケテケテユ、イイイイ”

— そうでしょう。じゃあ、行くよお。

破壊鬼皇は俺達に背を向けると、しょんぼりと肩を落としていた。とぼとぼと謎の女性の後について行く。数十mほど先で彼女はやつに何かを与えたようだったが、そのとたんまるで飼い主から餌を貰った飼犬のように、やつは尻尾を振りながら彼女の後を追いかけて行った。

途中、破壊鬼皇は俺達を振り返ると、片手を上げる動作をした。俺も反射的に右手を上げた。低いモーター音がして、動く筈のないグレートの右手も上がった。

そして、夕日に溶けこむようにして二人(?)はそのまま俺達の前から姿を消した。

(9)

「輝兄ちゃんって、特撮オタクだったんだね」

ひよんな事から見つかってしまったビデオを、松戸家の居間で庄之介君と2人で見ながら、俺は当時を思い出していた。

あの後、俺は再び辞令を受け取った。その結果がコレだ。何の因果で、防衛大学を首席で卒業した俺が、居候の浪人生の役なんかをやらされにゃあなんのだ。

もっとも、御手洗博士と毎日顔を会わせることよりは、はるかに増しのような気はするが、結果的にどっちもどっちである。だが、これも日本の、いや世界の平和と安定の為だ。致し方あるまい。

「庄之介えー、ハッキーに餌やつといてよねえ」

「ええー、またあ。・・・もう、しょうがないなあ」

「俺がやっときますよ」

巨大な『プリーティードッグミート粗挽きジャンボ缶・ニューグレート』を左手に抱えると、俺は庭におりた。その隅に、何の変哲もない木製の犬小屋があった。缶の蓋を引き剥がして、それを犬小屋の前に置くと、俺は小屋の脇に胡座をかいた。

「こんなちっぽけなところに押し込められてちゃあ、たまには遠出もしたくなるよなあ」

俺は誰にとも言うでなく呟くと、深く溜め息をついた。

「輝兄ちゃん、おじいちゃんが呼んでるよおー。御手洗のおじいちゃんが来たんだってえ。ねえ、輝兄ちゃん」

噂をすれば、だ。まいったな。俺は頭をかきながら立ち上がった。「お互い苦勞するよなあ」

犬小屋に一言告げると、その場を後にした。

” テケリッ、リリリ・・・ ”

縁側を上がろうとしている俺にやつが応えた。鈍く光るネームプレート**の**ぶら下がる小屋の暗い入口から。250mm x 85mmのプレートには草書体で【破壊鬼皇】と書かれている。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2753u/>

すーぱぁ大怪獣出現

2011年10月9日03時53分発行